

厚生労働科学研究(令和2年度 厚生労働科学研究
(障害者政策総合研究事業)
(辻井班・研修)

『国立機関・専門家の連携と地域研修の実態調査による
発達障害児者支援の効果的な研修の開発』

今回の研修のねらい①

- 発達障害に関する研究は世界的に非常に活発に行われており、さまざまな支援に有益な知見が積みあがっている。
- しかし、現状、発達障害の発達支援や地域支援に取り組もうとして、研修を受けたいと思っても、標準的に何を学べばいいのかが明確になっていない。
- 厚生労働省管轄の研究機関と文部科学省の研究機関、それに全国の各分野の専門家が集まり、実際に、発達障害児者の支援に取り組む支援者向けの標準的な研修プログラムを開発し、実際に研修を行うのがこの研修です。

今回の研修のねらい②

- 研修内容は、今後、様々な知見が積みあがるとともに改訂され、アップデートされている。
- 発達障害についての法的・制度的・医学概念的な内容はすでにあるオンデマンドの研修を受けていただき、ここでは実際の支援にあたる支援者向けに、主に以下の2点で構成。
 - ①発達障害の支援に必要な障害特性をどう理解するか
 - ②発達障害児者をどう支援するのか

厚労科研 辻井班（発達研修開発）

1) 1. 発達障害を客観的なツール
から理解する

中京大学現代社会学部
辻井正次

発達障害の支援において最初に考えること①

- 発達障害の人たちの支援において、最初に考えるべきことは、“その人がどういう人なのか？”ということについて、ご本人（当事者）と養育者・家族、他の支援者と共有できることである。
- 経験ある支援者は自分の経験からくる臨床感覚や独自のことで理解して共有するかもしれない。しかし、すでに、客観的に発達障害の特性を理解するために、科学的根拠（エビデンス）のあるアセスメント・ツールがたくさん開発されているので、ツールとしての研修を受ければ実施できる、比較的簡易なツールを通して理解するのがスムーズな研修の仕方になる。

発達障害の支援において最初に考えること②

- アセスメントをして、ご本人（当事者）や養育者・家族、他の支援者と理解を共有することで、実際の支援につなげていくことができる。
- 現在の状況を把握し、どういう支援が必要で、何をすればいいのかを把握し、支援計画を立てるためにもアセスメントはとても重要である。
- また、支援がうまく進んでいるのか、ご本人の状態が改善しているのか等を、適応行動（年齢相応のあたりまえの行動）等を把握していくことで確認していくこともできる。

発達障害のある人であることを、 客観的なツールで理解することの意義

- 発達障害特性を把握する（わが国では、医学的診断は医師のみが行える行為となっているので、それ以外の職種の実務者が行えるのは、発達障害特性の把握となる）。
- 状態像を把握する； 障害特性・臨床症状だけでなく、知的能力や発達状況、適応行動を把握することで現状を確認できる。
- アセスメント結果から、どういう発達支援が必要なのか想定することができ、発達支援を始められるので、発達支援の計画を立案できる。
- 発達支援をある程度行ってから、再びアセスメントを行うことで発達支援の効果について検討できる。

発達障害についての非常に基本的な考え方 (発達障害者支援法より)

- 発達障害者支援法によれば、「『**発達障害**』とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」
- 「発達障害がある者であって発達障害及び社会的障壁により日常生活又は社会生活に制限を受けるもの」
- 「『**社会的障壁**』とは、発達障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のもの」
- 「『**発達支援**』とは、発達障害者に対し、その心理機能の適正な発達を支援し、及び円滑な社会生活を促進するために行う個々の発達障害者の特性に対応した医療的、福祉的及び教育的援助」

支援のために何を理解しておけばいいのか①

- 発達障害を客観的に把握するためには、定型発達者（健常者）との連続性の中で、特にどういう特徴があるのかを測定していくことで理解し、その特徴的な部分を把握していく。身体疾患でも、血圧や血糖値等、客観的に把握できる数値の偏りのなかで把握できるものもある。
- 発達障害特性という形で、発達障害の人たちが特異的に示す行動や状態像を客観的に把握し、理解することで効果的な発達支援が可能になる。

支援のために何を理解しておけばいいのか②

- 発達障害特性には、自閉スペクトラム症の特性（なかでも、感覚過敏性等の感覚異常は環境調整のうえでも必要なもので別に把握）、ADHDの特性、LDの特性、発達性協調運動症（DCD）の特性がある。また、基本的な知的能力の把握に知能検査が、発達状況の把握に発達検査がある。
なお、わが国では乳幼児健診や就学時検診でスクリーニングを行っている。
- そのほか、実際に支援において必要なのは、ご本人が日常生活において、どの程度どういう適応行動をとれているのかという視点で、現状を把握する上で最も重要な視点となる。発達障害特性がとても顕著でも、日常生活において適応行動がとれていれば支援の必要性はより低いことになる。

アセスメントから支援へ

- この研修では、発達障害のある人たちに必要なアセスメントについて概要を知り、どういうアセスメントをどこで実施するのか、また、結果から何がわかるのかを理解することができる。
- ただ、実際のアセスメント・ツールの実施方法については、各々のツールについての実施方法研修や結果の解釈方法の研修や勉強会で学ぶことになる。
- アセスメント結果がわかり、発達障害特性や適応行動状況がわかった段階で、発達支援として様々な取り組みがあるので、それを発達段階ごとに順を追って学んでいただくことになる。